2010年7月15日

核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会 会報

2010.7.15
核兵器廃絶をめざす
富山医師・医学者の会
富山市桜橋通り6-13
電話　076-442-8000

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会 第11回総会記念

2010年ＮＰＴ(核不拡散条約)再検討会議

「ニューヨーク行動報告会」と「被爆体験を聞く会」

ＮＰＴ再検討会議は、核保有国が核軍縮の具体的な進展に向けて努力し、その成果を二〇一四年に開催する準備会合で報告するなどとした最終文書を採択しました。今回の要請行動に参加した富山県代表団のみなさんから、ニューヨーク行動の様子、現地の盛り上がりを写真とともに報告してもらいます。

また、核兵器廃絶を願う原点であるヒロシマ・ナガサキの実相について、県被爆者協議会会員の方の被爆体験をお聞きします。

とき　**8月2日（月）**
午後７時30分～９時

会場　**富山電気ビル**　４Ｆ　７号室
富山市桜橋通り3-1　℡ 076-432-4111
＊駐車場は、電気ビルタワーパーキング、または河口ビル駐車場が便利です。

対象　どなたでも参加できます

7:30～8:10
●ニューヨーク行動参加報告会
報告：富山県代表団のメンバー

8:15～9:00
●被爆体験を聞く（詳細は8面に）
お話：富山県被爆者協議会の皆さん

ニューヨークをパレードする富山県代表団

9:10～
●第11回　核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会　総会
活動報告と方針、決算・予算、役員改選など

会員の先生方は都合のつく限りご出席ください

中村哲さん講演会
「アフガンに命の水を」

医師でペシャワール会現地代表の中村哲さんの講演会が６月１７日、射水市ラポールで開催されました。主催は「中村哲さんの話を聞く会」（代表・土井由三氏）。当会は「共催団体」として企画・宣伝に協力しました。参加者は会場いっぱいの約８００人、閉会挨拶を当会の金井英子世話人代表が行いました。

中村　哲　氏

会場の射水市・アイザック小杉文化ホール（ラポール）

今日の感動と勇気を周りの人たちに

閉会挨拶　　金井　英子

今日の講演会の、この広い会場がいっぱいになったのは、中心となって尽力された「９条平和小杉の会」を始め、多くの共催団体が一生懸命に取り組まれたお陰だと思っております。

そういう中で、私に閉会の挨拶という白羽の矢が当たったのは、たぶん、講師の中村先生と同じ医師という職業であることと、同じように戦争や核兵器などやめて平和な世の中にしたいと願っている、ということでお鉢が回ってきたと、受け止めております。

中村先生のお話は大変感動的で、時には哲学的に私たちの心の中にズシンと重いものを落とされました。また思いもかけない加藤登紀子様のご挨拶は、心温まる人類愛的な感じを受け、心地よい講演会になったと思います。

乾燥した砂漠に水路がひかれ、１年後には緑が拡がり堰に水があふれている。その情景は私の出身の砺波の水路や堰、畑と同じでした。アフガンは遠い国ですが、同じアジア人、同じ血が流れている人間だなあとつくづく感じました。先生はこれらの仕事に、日本古来の土木や治水技術を使ったと聞いて、日本人ってすごいな、いいなと、皆さんも思いませんでしたか？

閉会の挨拶を行う当会の金井英子世話人代表

今日、私たちは中村先生から大きな勇気とエネルギーをもらいました。アフガンには行けない私たち一人ひとりが、自分の周りにいる日本人にたいし、またこの日本が平和と愛に満ちたよい国になるように、今日の勇気を糧にして、がんばっていきたいなと思います。

今日は多くの団体が共催団体として名前を連ねています。それぞれに、目標に向かって地道に活動されていると思いますが、このように一つのテーマで集まって、成功させるということは大変すばらしいことです。ぜひ、富山県でもこのような集会がしばしば開催されることを願ってやみません。

2010年7月15日

中村哲さんの講演

皆さん今晩は。２カ月ほど前にこっそり日本に帰っておりました。４日後にはまた現地に戻ります。富山は３０数年前に黒部に参りました時に寄ったことがあります。当時はこうしてここでお話する機会が持てるとは思っていませんでした。

今世界中で大きな課題になっているのは平和と命です。ここで一般的なことを言うよりも、私たちが現地で見てきたこと、やってきたことを、そのままご紹介して皆さんからの質問をお受けしたいと思います。

それではまず最新の映像から紹介します。

この間しばらくニュースの特集番組の映像が流れた

私は向こうで土木作業ばかりしておりまして、医者の仕事をほとんどしておりません。なぜ医者が土木工事をしなきゃならなかったか、そのいきさつが本日のお話の中心です。

ペシャワール会とは

さて、私たちの会の名前であるペシャワールはパキスタンの北西部、アフガニスタンとの国境に近い町です。ここを拠点としてアフガニスタン、パキスタンの両者にまたがって活動しています。

なぜ両方で活動するのか。それはこの地方がまったくの同一民族で、同じ言葉をしゃべるパシュトゥーン人がそれぞれ８００万人、計１６００万人暮らしているからです。この国境は外国が勝手に決めたもので、それが今でも紛争の種になっているのです。

もともと医療支援から始まった活動ですが、現在ジャララバードという町を拠点に水源拡張事業を行っております。現地の職員が１５０名、作業員が約６００名、計７５０名がこの事業に参加しているわけであります。これを財政的に支えるのが日本のペシャワール会で、年間３億円のすべてが全国２万人の寄付者から寄せられています。

山岳地帯、雪解け水、貧富の差

アフガンの面積は日本の１．７倍ですが、人口は約２０００万と言われております。５０００メートル以上の山々が連なり、国土の３分の２以上が山で占められるという山の国です。

また谷が深いために割拠性が強い。つまり、バラバラということですね。分かっているだけで言語は２０以上、数十の民族がこの狭い谷あいに割拠して暮らしている。中央政府があって、そこで決められたことがすみずみに行き渡るという、そういう国家ではありません。

それらを統合するのはイスラム教。どんな町に行っても必ずモスクやマドラサという学校があり、地域の要として存在しています。

２０００万の人々があの乾燥した中央アジアでどうして食べていけるかというと、あの白い山の雪のお陰です。アフガンはかつては１００％に近い穀物の自給率を誇る国でした。あの白い山の雪が夏に少しずつ溶け、川沿いに豊かな実りを約束してくれるということで、人も動物も命を長らえてきた、そういった地域です。

しかし貧富の差は甚だしい。アフガンで、私たち医者が無力感に打たれるのは、ごくひと握りの人々がちょっとした病気でロンドンや東京、ニューヨークへ簡単に飛んでいって治療を受けることができるいっぽうで、数十円のお金がなくて命を落としていく人が数知れないということです。日本に帰っていつも不満に思うことは、こういった普通の人々の声がなかなか届きにくい。アフガンの再建だの対テロ戦争だのと言ってる方々は、英語が喋れて外国人に取り入ることが上手な人たちの声だけを聞いているのではないか、と思うことがしばしばあります。

現地の文化や慣習を大切にする

外国人が一番犯しやすい過ちの一つは、異質なものを見ると、単に「違い」であるものを、善悪や優劣という尺度でもって裁いてしまう。たとえばアフガン女性の被るブルカは、好き嫌いは別にして慣習です。これについてある国際人権活動家が、男女差別の最たるモノでやめさせないと民主国家にならないと言う。

私たちは社会改革のために現地にいるのではありません。病気を治し、一人でも多くの人を助けるために、地域の慣習や文化に干渉しない、地元と力を合わせて行動するという鉄則を貫いてきま

した。たとえば女性の患者を女性の医療職員は自由に診ることができますので、日本から多くの看護師、医師、検査技師などの女性ワーカーが来まして女性患者の診療にあたりました。

難民キャンプでハンセン病治療

私が行った１９８４年はアフガン戦争の真っ只中でした。１９７９年１２月、ソ連軍の精鋭部隊１０万人が大挙してアフガニスタンに侵攻し、それ以来アフガンは何と９年間、戦火の巷に置かれた。死亡した人は最低に見積もって２００万人、難民となって国外流出した者が６００万人。私たちも難民診療という立場を通してアフガン問題に巻き込まれていったわけです。

初めは難民キャンプで活動していましたが、患者がハンセン病でよかったと言う。なぜかと聞くと、他の病気ではこんなに親切に診てはもらえないのだそうです。他にマラリア、腸チフス、結核、デング熱、ありとあらゆる感染症も治療しました。一刻も早く治療をしなければ死亡してしまう、このような所で、ハンセン病だけを診るのは無理です。内戦が下火になってから私たちは患者の多い山奥に診療所をつくり、いろいろな病気を診ながら、そこを拠点にハンセン病を特別扱いせず、いろいろな病気のひとつとして診るということを始めたわけであります。

当時、アフガニスタンとパキスタンの国境地帯を我々は自由に行き来していました。私は足だけは強かったので、峠を越え谷を渡って診療所開設予定地の人々と信頼を深めていきました。アフガンの最も山奥に住んでいる民族の居住地が私の担当したところです。日本で報道される映像はごく限られた地域、例えば首都カーブル。こういったところで医療支援をしていると受け取られがちなのですが、実情はこういった山岳地で活動しているのです。

山岳地帯の医療支援に行ったときに、私は初めてフランス人と間違われました。なぜか悪い気はしませんでした。聞いてみると、ここに入ってきた外国人は私が初めてで、たまたま村長さんが外国人はフランス人しか知らなかったので間違えられたのですね。

好意的に受け取られた日本人

私が日本人だとわかると、非常に好感を持たれました。なぜか。アフガンではどんなに山奥に行っても、どんなに学問のない人でも日本について連想するものは２つある。「日露戦争」と「ヒロシマ・ナガサキ」、この二つの言葉はどこに行っても皆知っている。日露戦争についていうと、１００年前のアジアは、ほとんどがヨーロッパ列強の植民地ないしは半植民地だった。その中で、あのちっぽけな日本が超大国のロシアと戦争して負けなかった。勝ったとは言えないまでもロシアに負けなかったということが、当時のアジアの国々の人々に大きな勇気を与えて、それがいまでも語り継がれている。「どんなに相手が大きくても理不尽なことに屈しない、不撓不屈の日本」という美しい誤解があるんですね。

広島・長崎に至っては、単にかわいそうだという以上に、あれだけ痛手を受けたのに、戦後見事に技術立国として立ち直った。これだけの繁栄を誇りながら、日本は一度も海外派兵したことのない平和な国という憧れがあった。これらが誤解であったとしても、それがあるべき我々の姿を示しているのであって、日本はそれに少しでも近づく努力をしてくるべきではなかったかと思います。

アフガニスタンに侵攻したソ連軍は１０年を経ずして出ていきました。あれ以来、私は評論家と報道関係者を一切信じません。というのは、世界中の評論家と報道関係者は「ソ連、ロシアという国は一旦占領したところは絶対に手放さない、アフガニスタンもきっとロシアの衛星国になるに違いない」と言っていた。ところが地元の人は違う。「先生、このアフガニスタンはずっと昔から独立国で、征服されたことがないんだ」と言う。「いつ頃からか」と聞くと「アレキサンダーが攻めてきて以来、一時的に占領はされても決して征服されたことない」と言う。それは国民の誇りになっているんですね。その通りになりました。

大干ばつで村が消えていった

ソ連軍の撤退のあと、一時的な内乱状態を経て次々と難民たちが帰ってきました。それに合わせて私たちはアフガン国内に次々と診療所を建てていきました。

そうこうするうちに１５年が過ぎましたが、内乱状態から全国を統一したのがタリバン政権でした。タリバン政権については大きな誤解があるようですが、私はほっとしました。治安が非常によくなった。それまで物資を運ぶ途中で強盗に襲われたり、診療所を襲撃から守るために重機関銃を備え付けるという状態でした。これがタリバン政権の登場でわれわれも銃器を持ち歩かなくてもよくなったわけです。

ペシャワールの基地病院の建設が１９９８年４月のことでありますが、さあ今から腰据えてやろうというときに襲ったのがアフガンの世紀の大干ばつでした。現在進行する中央アジアの干ばつで最も被害を受けたのはアフガンでありまして、人口の半分以上に相当する１２００万人が被災し、６００万人が餓死線上でまともにごはんが食べられない。さらに１００万人が餓死寸前という警告

をＷＨＯが出しました。しかし当時の国際社会はアフガンの食糧支援については一言も言わず、これを無視し続けたのです。

村が次々と消えていく。１年前まで緑豊かな穀倉地帯であったところが、もう翌年にはカラカラで砂ぼこりが舞う大地に変わった。いっせいに農民たちは村を去り、都市部に職を求めたり難民となってパキスタン側に逃れていく。事実私たちの診療所の周りも一時はもぬけの殻となりました。

薬で飢えや渇きは治せない

ともかく２０００年に始まった干ばつによってどれだけの人の命が失われたことか。多かったのは、子どもの下痢症、赤痢、腸管感染症。診療所に辿りつけるのはまだましな方で、診療所に着く前に子どもが母親の胸の中で冷たくなっていく姿は、ほぼ日常的に見られた光景でした。清潔な飲料水がない、そのために病気にかかりやすい。ご飯が炊けないから、栄養失調が圧倒的に多い。そうすると抵抗力がなく、そのために、ちょっとした下痢で脱水状態を起こして死んでしまうということが日常的にあって、私たちは診療していても虚しいのですね。とにかく抗生物質では飢えや渇きは治せない、飢えや渇きを治さないと病気は治せない。あのとき水さえあれば、９割以上は病気にならなかった、死ぬことはなかった人々ではないかと思います。これが冒頭で述べた、医者である私が土木工事をやっている理由です。

私たちは残った村人を集めまして、清潔な飲料水を求めて井戸を掘り始めました。これが２０００年８月で、一昨年まで続いておりまして、今に至るまで約１６００カ所に掘って、少なくとも数１０万人の村人が、ともかく村を離れずにすんだということです。

国連制裁、さらに米軍による空爆が…

そうこうするうちに、２００１年にアフガニスタンに対し国連制裁が行われました。前の年の２０００年の１０月にペルシャ湾岸に停泊していたアメリカの駆逐艦が自爆攻撃を受けた。この首謀者とみられるオサマ・ビン・ラディンを客として処遇していたのがアフガン政府、タリバン政権でありましたが、オサマを置いているというだけでもって国連制裁が行われたのです。初めのころは食糧制裁が中心でしたが、餓死者が１００万人というときに食糧を断つという神経はどうなのか。このことはアフガンの人々に外国に対する不信感を植え付けました。結局、国連の現地職員の猛反対によって、食糧だけは制裁項目から外されましたけれども、国が一番困っている時に最もひどい仕打ちを受けたということです。

９・１１のニューヨークのテロ事件が発生しますと、アメリカの方もブッシュ大統領が翌月からアフガン空爆を強行した。とにかく強行軍で空爆が始まった。

あの当時、私は今でもはっきり覚えています。軍事評論家が言ったのはですね、アメリカの攻撃はピンポイント攻撃でテロリストだけを攻撃する人道的なものだと。そんなことがありうるのか。私たちが見たのは無差別爆撃だ。犠牲になったのはほとんどが子ども、女の人、老人、こういう逃げ足の遅い人たちが犠牲になった。

あのころ日本中もどうかしていた。

決死の食糧配布

私たちとしては、今アフガニスタンは戦争どころじゃない、食料問題なんだと訴えました。タリバン政権は放っておいてもつぶれるような政権なのに、なんで束になって攻撃する必要があるのか。しかも死ぬのは一般市民がほとんどです。ともかく食べ物が必要だということで、アメリカが爆弾を落とすなら、我々は食糧を配給しようということで、当時日本で食糧配布を呼びかけますと、数億円の資金が寄せられました。これによって私たちは、飢え死に寸前であったカーブル市民１０数万人の人々に、１８００トンの小麦粉、２０万リットルの食用油を送って、人々は九死に一生を得たわけです。

食糧配布を実行したのはうちの職員の２０名の志願者です。爆撃下なので私はたとえ１つの班が全滅しても残りのチームが任務を敢行できるようにと、３班に分けるよう指示しました。幸い、無事に配布を終えました。このように私たちの活動の底力になっているのは、勇敢なアフガンの人たちなのです。同胞のためなら自分の命が危なくてもやる、これが底力となっているわけです。

タリバンが消えて解放されたのは…

その後２００１年１１月になって、タリバン政権が倒れました。その時世界中のテレビで流された映像は、極悪非道の悪のタリバンを倒し、絶対の正義の味方であるアメリカと後押しされた同盟軍のカーブル入場を、歓呼の表情で迎える市民の姿。抑圧の象徴であったブルカを脱ぎ捨てて自由を謳歌する女性たちの姿。これらの映像が繰り返

し流されることで、世界中がまたこれでコロリと騙されました。それまで戦争に反対していた人も、これでなんとなく落ち着いたのかなという安心感を持って、アフガン問題は日本人の頭から消えていったわけです。

ここに美しい花が写っていますが、ケシ畑です。タリバン政権時代にほぼ絶滅に近かったケシ栽培が、１１月にタリバンがいなくなった後、１２月に盛大に復活して、３年後には世界の麻薬の９３％を生産する麻薬大国になってしまいました。

たしかにアフガニスタンは解放された。何が解放されたのかというと、ケシ栽培の自由、女性が売春せざるを得ない自由、貧乏人がますます貧困化していく自由、ことばが上手で外国人におべっか上手な人がますます裕福になっていく自由が解放された。そう言って、私はおおかた間違いはないだろうと思います。

そんな中でも、私たちは何事もなかったかのように活動を継続したわけです。

用水路の建設に挑む

水が飲めるだけでは生活が成り立ちません。さきほどアフガニスタンの８割は農民だと言いましたが、その農業用水を確保するということがとりもなおさず、アフガンの復興そのものです。

それで私たちは、カレーズという地下水を利用した長い横井戸を次々修理しました。ところが、名前はカレーズでもこれが涸れるのですね。地下水そのものも涸れていくという状態でした。幸い雪とか雨の絶対量は減っていないので地表水の有効利用、これしかアフガンでは手がない、ということになりました。

中小河川は溜池で対処できるが、大河川については大きな用水路を引こうということで始まったのが２００３年３月に着工した全長２５．５kmのマルワリード用水路でありました。クナール川から取水して乾燥地域を潤すことで３０００ヘクタールの農地を蘇させようという計画です。

江戸時代の土木技術と人海戦術

まず私が考えたのは、鉄筋コンクリートをやたらに使い、自然に逆らうような人工的な工事をしますと、コストがかかるだけでなく、地元の人々にはメンテナンスが難しいということですね。ないないづくしのようなところで、最も役に立ったのは、江戸時代の日本の治水土木技術でした。

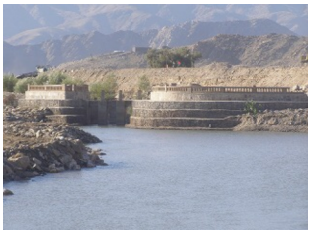
外国人（私も含めて）が去る日が来る、それでも地元の人々は現地に残って生活せざるを得ないわけです。その地元の人でもメンテナンスできるものといえば、日本の江戸時代に完成された技術に勝るものはないわけです。人海戦術を駆使しまして蛇籠（じゃかご）と呼ばれる護岸法で、これを中心に水路をつくりあげました。

それでも大量の蛇籠を生産する態勢が必要です。地元の人々が蛇籠工房を建て、針金をパキスタンから輸入し、６、７年間の間に約５万個を作りました。そうして、熟錬工に近い人材が地元で育っていくわけですね。

用水路の両側に柳を植えました。これは柳枝（りゅうし）工と呼ばれ、昔からの伝統的な工法です。柳の根が蛇籠の背面から底にかけて網のように張ってきます。針金が錆びても柳の根が生きた籠となって石をしっかり抱える。これも、江戸時代にすでに完成した一つの技術です。偉大なご先祖様だとあらためて思いました。

また現地の人は石と泥で家をつくるので、皆石積みの技術を持っているので、蛇籠だと自分たちで修復もできるわけです。

最も工夫したのは水の取り入れ口です。これは斜め堰という方法で、九州の筑後川にある江戸時代の山田堰をそのまま再現しました。この堰のすごさというのは、春夏秋冬ほぼ一定の水量がとれる、どんな洪水が来ても崩れない、それから季節を問わず過剰な水位を抑える、低水位でも水を集めて送るというものです。私はナショナリストではありませんが、日本の技術というものは明治維新後欧米の知識を吸収してここまできたと思い込んでいますが、実は我々のご先祖様の水利技術は江戸時代、すでに世界的な水準にあったとあらためて思い知りました。



そして、砂漠地帯約３．５kmを貫通して完成いたしました。みん

な喜びましたね。それもそのはず、彼らとしては命拾いをしたという思いなのですね。これは日本の今の人たちには伝わりにくいものがあると思いますが、水がない中で子どもが次々と死んでいく。どこかに移り住んでも職がないという中で、やはり九死に一生を得たというこの思いこそ、みなさんに伝えたいことであります。

米軍の圧力

用水路建設で障害になったの自然だけでなく、人間たち、特に米軍や軍閥（地方の地主など）などがたびたび妨害しました。米軍がときどき機銃掃射をしたので抗議すると、「おまえたちが悪い、我々は疑わしきは攻撃してから確認する」と言われました。ある調節池を米軍が利用したいというので嫌だと断りましたら「我々に逆らうのか」と脅されました。「私はいったん逃げますが、この池は下流で暮らす１５万人の命綱ですから、彼らが黙っていない。彼らがあなたたちに何をするか想像がつくが、私はその責任は取りませんよ」と言いました。以後、再検討するということで棚上げになっています。

マドラサの建設

水の通ったところは次々と緑になっていきました。これは乾燥していた頃の写真です。次の写真は同じ場所の現在の状態です。

そうすると沢山の人々が帰ってくる、すると共同体が生まれます。初めにお話したように徹底した地方自治のアフガン農村の特質で、その安定の要となるのは地域のモスクとマドラサです。マドラサというのはモスクに付属する学校です。マドラサというとタリバン勢力がわき出してくる温床という偏見が世界に行き渡っています。それは誤解なのですが、マドラサと聞いただけで、欧米や国連団体は支援しません。実際政治性というのはほとんどなく、村同士の水争いや家族同士の仇討ちなど、地域のもめごとを解決するセンターのようなものであり、精神的な拠り所と考えていいでしょう。私たちはアフガンの地域共同体に不可欠のものということで、積極的に建築をすすめました。

平和は大地の上に築かれる

今、着手しているのは用水路の最終地点であるガンベリ砂漠で、約２００ヘクタールの開墾が行われています。これまで緑化した地域というのはもともと緑豊かだった土地ですから回復が早い。しかしここはまったくの砂漠地帯です。ここに水がきたことで私たちの作業員や現場監督として長く働いてきた人たちの村を作り、彼らに用水路の維持・復元をさせようというわけです。水路の末端ですから彼らが食べていくためには、取水口からずっと保全していかないと自分たちのところに届かないですから、この用水路はおそらくずっと続くだろうと思います。

去年の８月、この砂漠横断路が通水してみんな大喜びでした。現地の勇敢な職員たちが、日本の良心的な人々に支えられて、軍閥や米軍、自然の猛威を押し返して完成させたと言えます。さらにアフガニスタン全土で草地が減っていて、草地の多い北部に米軍が展開して安全ではないことから、奇跡的に緑化したガンベリ砂漠が遊牧民たちのオアシスとなっています。

またジャララバード周辺や、アフガン東部で最も肥沃な地帯だと言われるカマ地域の取水口、ここも実は砂漠化寸前、そういうところの取水口も改修しました。これによって約６０万人の人々が安心して暮らせるようになったと言ってもいいわけです。

私が辛いことばかり言いましたので、皆さんは現地の人々はみな暗い顔して暮らしているのではないかと思われるかもしれませんが、決してそうではありません。日本からやってくる日本人ワーカーの方がよほど暗い顔をしています。私もそうでしたけれども、この哀れな人々を助けなければという気負いが強いのですね。

今世界で「金さえあれば何でもできるんだ」という迷信、「武器さえあれば身が守られる」という妄想が蔓延しています。私は２５年間いまして悟ったことがあります。つまりモノが無ければないほど人々は楽天的になる、逆に、持てば持つほどそれを失うまいとして暗くなるのではないかと。「情けは人のためならず」と言いますが、おかげで自分も楽天的な気持ちで生活できるようになりました。

話が説教臭くなってきましたのでこのへんでお話を終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

＊画像はペシャワール会のホームページより利用させていただいています。（編集部）

富山公演を翌日に控えた加藤登紀子さんが飛び入りで激励トーク。中村さんとの出会いから、ペシャワール会の活動に対する自身の思いを述べられました。

被爆体験を聞く会

8月2日（月）
午後8時１５分～9時
富山電気ビル　４Ｆ７号室

－ お話しされる人 －

Ｔ・Ｈさん（７９歳女性・高岡市在住）
長崎の爆心地より１．３㎞の三菱兵器工場内で被爆。爆風でとばされ、頭はパンチパーマのようになり、一生懸命走り続けた。消防団の人に「あんたは家と反対の線路を逃げている、戻りなさい」と言われ、山越えし、途中でトマトやキュウリをもらって、２日めに我が家に戻った。母は逆に娘の骨を拾いに中心地まで探し回った。

Ｋ・Ｙさん（８８歳男性・砺波市在住）
広島で８月６日以後、一週間の入市被爆でした。除隊後富山へ帰り、現在に至るが病気がち。
２１歳で招集、佐賀、東京、青森、加古川、和歌山を転々。国の命令で動かされ、最後は広島にて被災者の救助活動にあたった。８月１７日和歌山で散会、２０日に帰宅できた。

＊Ｔ・Ｈさんは狭心症、乳がん、甲状腺がん、座骨神経痛とたたかっています。「当時のことをお話できるか心配」と言っておられますが、大丈夫だと思います。
二人の体験者は生き残りの命、なくなった人の分まで生き抜こうと話しています。
（富山県被爆者協議会事務局　水野耕子）

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

第11回 総会のお知らせ

8月2日(月) 午後9時10分～
富山電気ビル　４Ｆ・７号室

- 2008～2009 活動報告
- 2010～2011 活動方針
- 2008～2011 決算予算
- 2010～2011 役員改選

■世話人代表
金井　英子　（砺波市・金井医院）
■世話人副代表
黒部　信也　（富山市・富山協立病院名誉院長）
小熊　清史　（魚津市・小熊歯科医院）
■世話人
太田　真治　（高岡市・おおたファミリー歯科医院）
瀧　　邦彦　（富山市・滝医院）
矢野　博明　（射水市・矢野神経内科医院）
与島　明美　（富山市・富山協立病院）
■顧問
片山　　喬　（富山市・富山医科薬科大学名誉教授）

会費納入のお願い

私たちの会の活動は、会費中心に運営しています。活動の基盤となる財政を確保するため、先生の入会ならびに２０１０年会費の納入をお願いします。
会の趣旨に賛同し、入会を了承される先生は、ＦＡＸまたは電話でその旨ご連絡ください。会費納入用郵便振替票をお送りします。

◇年会費　５，０００円（毎年７月期首）
◇振込方法　「郵便振替」をご利用下さい
◇振込先
加入者名：核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会
口座記号：００７３０　４
口座番号：３３１７１
◇連絡先電話番号　076-442-8000

編 集 後 記

●中村講演共催の話があった春頃は、目標の６００人をどう集めるか心配だった。日が近づくにつれ前売券は総席数を超え、当日は立ち見が出るほどだった。おかげで講師料とは別に、ペシャワール会に１０４万８，５１３円を寄付できたという。
●録画ビデオを事務局の「９条平和小杉の会」からお借りした。何度も聞いているうちに、けっして押しつけがましい言い方をしない中村医師だが、言葉の端々に激しく強い意志が垣間見えた。
●大国のエゴを押しつける旧ソ連やアメリカへの不信の源は怒りであろう。一方で、ひとりの日本人の不幸を国をあげて大騒ぎしながら、現地の惨状には目を向けようとしない政府やマスコミ、潮がひくように無関心に戻っていった世論にふれたときの寂しそうな表情は何とも言い難いものがあった。（Ｓ・Ｍ）